

学位論文題名

完新世初頭における移動・居住形態の復元的研究

－北海道における石刃鏃石器群を例に－

学位論文内容の要旨

(はじめに)

狩猟採集に依存する集団が移動をおこなっていた地理的範囲を限定し、そこで展開していた諸活動を復元することを目的とする研究を「移動・居住形態研究」と定義し、それが一般的な予測・可能性の指摘にとどまっている現状を指摘する。

(第1章)

遺跡は、無限定な空間のなかに散在しており、きわめて広範な「遺跡間変異」が観察される。遺跡間変異のあいだに共通する「行動連鎖」のパターンを読みとり、そこに「補完関係」を見いだすことによって、「遺跡間接続」を指摘する。この手続きによって、移動・居住形態の復元が可能となる、という見通しを提示する。

つづいて、北西ヨーロッパ(ブリテン島・南スキャンディナヴィア)の中石器時代、日本の後期旧石器時代～縄文時代初頭の先行研究を概観し、北西ヨーロッパの中石器時代の環境と文化の輪郭を紹介するとともに、上に紹介した見通しの妥当性を検証し、具体的な分析の方針を検討する。その結果にもとづいて、

1. 行動連鎖のなかに補完関係を指摘できたとしても、共通の技術的基盤を確認できなければ、同一集団の行動の軌跡をしめすとは判断できないこと
2. 経験的にとらえられる遺跡の分布状態が、移動・居住活動の範囲を反映していると断定する根拠はなく、遺跡間変異の補完性が唯一の確実な根拠となること
3. 補完的關係をしめす事象のうち、動物遺体と石器の製作・使用のプロセスだけが確実な根拠を提供すること
3. 対象とする地域の遺跡分布が、海水準変動を中心とする更新世末期から完新世初期の環境変動の影響を受けていることに留意する必要があること

を指摘する。そして、遺跡間変異をとらえるに十分な資料の蓄積がある反面、継続期間がきわめて短く、時間の経過にともなう変化を考慮に入れる必要性はきわめて低く、顕著な技術的特徴がみとめられるという理由にもとづいて、石刃鏃石器群を分析の対象とすることを述べる。

(第2章)

羅臼町オタフク岩第2地点の資料の検討にもとづく、剥片の生産工程の検討。

自然面を残している石核と剥片の観察から、露頭の付近で採取した黒曜石の不要部を除去したものを母形として、これに稜・平坦面(調整打面)を作り出し、石刃核が完成する。調整打面を残す剥片が存在し、剥離の進行に伴って、打面の再生がおこなわれたことが

確認できるが、石刃・石刃核に残る剥離面は同一方向をしめす場合が圧倒的に多く、打面の転移は殆どおこなわれず、同一位置・方向からの加撃が継続的におこなわれたことが推測できることを指摘する。

資料のなかの不定形剥片は、石刃核の加工・調整に由来するもので、石核の製作から石器の加工にいたる一連の作業が、この遺跡のなかで行われていたことが確認できる。石刃は形態もサイズも一定範囲に集中し、石刃鏃・彫器・削器・搔器など主要な器種の素材となっている。不定形剥片も、尖頭器・石筥などの素材に利用する。石刃鏃の素材には、彫器の素材より細身・薄手の石刃を選択しているが、石刃のサイズは正規分布をしめし、石刃の使い分けにとどまり、作り分けではないと判断される。

(第3章)

石刃鏃石器群は沿岸と内陸に偏在し、石器の組成にも顕著な差がみとめられる。その原因を、系統的な差とする意見と、生業活動の差とする意見がある。

女満別町豊里・網走市湧別市川・常呂町トコロ貝塚・浦幌町共栄B・富良野市西達布・富良野市東山・北見市川東羽田の資料を検討し、オタフク岩石器群と技術基盤を共有していることを確認し、石刃鏃石器群の分布・遺跡間変異が、同一とみなすことのできる集団の、二種類の行動連鎖の産物であることを指摘する。

剥片生産、石錘・磨石・石皿などの礫を素材とする石器の有無、竪穴住居の存否を検討してみると、上に挙げた諸遺跡は、長期にわたって反復して利用され、剥片剥離・漁撈・植物性食料の採集と加工など、多様な活動の痕跡をとどめているもの（オタフク岩・豊里・湧別市川・トコロ貝塚・共栄B）と、短期間のかぎられた範囲の活動の痕跡しかとどめていないもの（西達布・東山・川東羽田）に区分され、前者（第一種）は沿岸に、後者（第二種）は内陸に偏在する。

この二項対立的な変異は、石刃鏃石器群を残した人びとの、行動連鎖の補完関係をしめしている。沿岸部・内陸部のが技術的基盤を共有していることがあきらかである以上、両者のあいだに系統的な差異が存在するとは考えられない。沿岸―内陸にまたがる移動・居住形態が採用されていたことを想定するのが妥当である。

(第4章)

第一種の遺跡は、いずれも沿岸・低標高の場所にあり、微地形の面でも共通性が顕著であることがあらためて確認できる。それに対し、第二種の遺跡は、内陸・高標高の場所という点では共通するものの、山地、丘陵、段丘、あるいは洞穴など雑多な地形を選択している。第二種の遺跡が、第一種の遺跡にくらべて選挙の期間が短く、そこで行われた活動の内容が安定していなかった結果であると解釈する。

珪藻・軟体動物群集・微地形とそれを構成する堆積物などの分析によって、北海道東部の完新世初頭の古地形の復元は、きわめて高い精度に達している。この成果によれば、北海道東部の沿岸地域は、海岸線が現在よりも内陸に進出していた地域（オホーツク海沿岸・釧路平野）、海岸線の位置が現在と変わらぬ位置にある地域（知床半島）、当時の海岸線が水没している地域（根室海峡沿岸）に区別できる。

この状況は、第一種の遺跡の有無や、分布状況と調和するもので、移動・居住活動が沿岸―内陸にわたる範囲で展開していた、との解釈を補強する。

(おわりに)

第四章までに展開した主張を要約し、それをうけて第一章で提案した方法論が、移動・居住形態の復元に効果を発揮したこと、それゆえ移動・居住研究を推進する有力な手段となることを指摘する。器種ごとの製作・使用・廃棄のプロセスに、さらにきめ細かな分析をくわえることによって、遺跡の種別の細分やそこでおこなわれた活動の内容をあきらかにすることができるのと展望を述べ、論文のむすびとしている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 林 謙 作
副 査 教 授 菊 池 俊 彦
副 査 教 授 煎 本 孝
副 査 助 教 授 小 杉 康

学 位 論 文 題 名

完新世初頭における移動・居住形態の復元的研究

－北海道における石刃鏃石器群を例に－

高倉氏は、日本国内で公表されているものはいうまでもなく、諸外国で発表されている先行研究の文献を克明に網羅し、その内容を咀嚼・吸収したうえで、この論文を執筆している。そのなかには、日本国内では入手不可能なものも含まれている。ただし、南スカンディナヴィアにおける状況をも考察の対象としているにもかかわらず、デンマーク・ノルウェー等の原語論文はまったく利用していない。しかし、わが国でスカンディナヴィア系言語がまったく普及していない実情を考慮すれば、無理からぬことといえる。関係文献の収集・理解の面での高倉氏の努力は高く評価でき、引用の方法・内容の理解にも問題がなく、自立した研究者として研究を進める資格と能力をそなえていると判断できる。

石刃鏃文化は、完新世初頭に北海道東部に出現する。類似する文化がサハリン、アムール河流域などに分布する一方、日本列島内の更新世末期～完新世初期のいかなる文化ともつながりを持っていない。このような特徴から、従来の研究では、もっぱら伝播論・系統論の観点にたつものが主流となり、世界的な研究の水準からみれば大幅な立ち遅れがみられるのが実情であった。高倉氏は、一方ではひろい意味の集落論の観点を導入し、他方では古地形・古環境の復元など、隣接領域の研究成果を参照し、この文化がけっして特殊なものではなく、更新世から完新世にわたる地球規模の環境変動に対する中～高緯度地域の住民の普遍的な適応の一形態であることをあきらかにした。本論文のもっとも高く評価すべき価値はここにあると判断する。

狩猟採集民が移動生活を送っていることは、ひろく認められている。しかしこれは、現存する狩猟採集民の観察にもとづくものであって、考古学の立場から、物質的な資料にもとづいて、過去の狩猟採集民の行動を復元しようとするれば、独自の論理と方法が必要となる。高倉氏は、この作業をおこなうにあたって、普遍的でしかも具体性の高い基準を設定する必要があることを指摘し、遺跡間接続をはじめとするいくつかの作業概念を設定する。また一方では、

1. 技術的基盤（とくに剥片生産システム）の共通性が、比較対象を選択するうえで動かしがたい前提となること
2. 同一の技術的基盤を共有する石器群のあいだにみられる補完関係が、移動・居住

形態を復元する決定的な指標となること

を指摘し、一連の分析の結果、沿岸と内陸にまたがる移動・居住の「モデル」を提示する。ただし、ここで高倉氏が「モデル」と主張するものが、氏の考えるように演繹的なものであるか否か、問題がないわけではない。審査委員のあいだでは、氏が提示したモデルは帰納的な解釈モデルである、という意見が支配的である。ただし、この点は世界の考古学界でも混乱があり議論が進行中であることを考えにいれば、決定的な誤りとはいいいがたい。

高倉氏は、石刃鏃文化にともなう石器群（以下「石刃鏃石器群」）の基盤が石刃技法であるとして、その技術的特徴の抽出に精力をそそいでいる。これは作業目標の設定としては正当なものではあるが、石刃鏃石器群の技術システムを過度に単純化する結果となっている一面があることは否定しがたい。石刃の消費過程で、石刃鏃と彫器の素材の使い分けを指摘はしているものの、分析が十分であるとはいいいがたいこともあきらかである。審議の過程で、石刃鏃石器群の歴史性が浮かびあがってこない原因がここにあるのではないかと、という指摘がなされている。しかしながら、これは石刃鏃石器群の個別・歴史的特性よりは、完新世初頭に普遍的な適応の形態としての側面の究明に重点をおくべきである、との指導教官（林）の判断の結果であって、かならずしも高倉氏本人の責任にのみ帰せられるべき問題ではない。

第4章の古地形の復元・遺跡の立地条件の分析は、本論文の特徴のひとつである。しかし、この部分を独立した論文として評価をすれば、あきらかに前提条件が単純すぎることは否定しがたいし、分析の肌目が粗すぎることも一目瞭然である。

本論文には、このような弱点があり、完璧な仕上がりというにはほど遠いことはあきらかである。しかし申請者本人も、本論文がこのような弱点を含んでいることは十分に自覚しており、すでにそれを補う作業に着手している。

審査を担当した四名の教官は、以上のような条件を評量し、本論文が学位請求論文としての水準に達しており、申請者・高倉 純氏に博士（文学）の学位を授与することが適当である、との意見に全員が合意した。